



世田谷区深沢 4-10-1
東京学芸大附属世田谷小学校内
青山附属同窓会

<https://aoyama-dosokai.jp>

青山附属同窓会

検索

発行人 森 昭彦
編集人 斉藤研一

藤の実ファミリーデーのご報告

二月十七日、「第9回藤の実ファミリーデー」に、同窓会としては初めて出店をしました。これは、以前から附小で、PTA組織である青山会が主催しているバザーのようなお祭りで、児童や保護者、現旧教職員の方々や卒業生が自由に集い、ゲームをしたり、買い物をしたり、食べたりと、楽しく過ごすイベントです。

「ファミリーデー」という名の通り、附小ファミリーの一員である卒業生にも、もっと参加してほしいという学校側からの誘いもあり、卒業生に広く告知するとともに、同窓会のコーナーを設けて、「校章入りミニどら焼き」の販売をしました。

当日は、私達幹事の予想をはるかに超える一三〇人余りの卒業生が来場し、そのご家族も含めると二三〇人近くにのびりました。

小さなお子さんを連れてくる方も多く、恩師に我が子を紹介したり、「これがパパの学校だよ」と、お子さんに語り掛ける微笑ましい姿もありました。中には、来場した後、学校の近くで先生もお呼びして、家族連れでのクラス会を開いたクラスもあったと伺っています。この機会をこのように利用していただき、嬉しく思いました。

どら焼き販売については、開場五〇分後に用意していた三〇〇個がすべて売切れてし

まいました。在校生にも好評で、何十年も先輩であるスタッフから小さな手にお釣りをもらう在校生達の姿を見て、今までこのような交流はなかったなあ、と感慨深かったです。利益分は寄附され、学校のために使われます。

来年も二月中旬から三月初旬に開催される予定です。詳細が決まりましたら、同窓会のホームページや、Facebookでお知らせします。卒業生の出店も歓迎ですので、興味のある方は同窓会までメールでご連絡ください。

今後もこのイベントへの参加を通じて、附小ファミリーの輪を広げていきたいと思っています。(小林哲子)



青山キッカーズ大好評



射的も大賑わい



看板



校章入りミニどら焼き



附属小学校の近況

副校長 越後 佳宏

2024

同窓会の皆様、いつも附属小学校をあたたく見まもりご支援をいただき、ありがとうございます。

開校から百四十九年目を迎えました。来年度はいよいよ百五十周年です。

文部科学省の「研究開発学校」は、昨年度で終了し、今年度からは「教育課程特例校」の指定を受けて、「学びを自分でデザインする子ども」を育む教育課程の創造」を研究主題として、一〜六年生が各五



〜六人で編成されるHomeの活動、学年ごとに行われる科学習Classの活動（一、二年生は学級担当、三〜六年生は教科担当）、Laboratoryの活動（三〜六年生）の三つの活動領域での教育課程を、研究指定を受けていない学校でも実施可能な教育課程として一般化を目指し、広く発信していくことを目指しています。

Homeでの活動は生活を重ねるごとに異年齢のかかわりが自然体でできるようになり、やさしいかわりの姿をいろいろな場面で見ることができるようになってきました。写真は昨年度の宿泊活動で上の学年の子が下の学年の子を気遣いながら一緒にハイキングをしている様子です。このような姿を多くみられるようになってきたことが、取り組んできた教育課程の大きな成果であると感じております。

昨年度は、二月の「ふじのみFamilyDay」に同窓会からもご来店いただき、世小の校章入りミニどら焼きを販売していただき、大好評でした。多くの同窓生にもご来校い

いただきました。在校生・同窓生にとつて世小が「集まり散る子の夢の宿」として心のよりどころとなっていると感じることができたひとときでした。

今年度は、夏から冬にかけて体育館の改修工事を予定しています。長年の希望であった空調も整備される予定です。

【教員の異動について】

☆お世話になった先生

▽久保賢太郎 先生

平成二十六年に本校に赴任され、十年間在職されました。

体育がご専門で、運動の得意な子ども、苦手な子ども運動するたのしきを感じ、「仲間とともに運動をたのしめる子ども」を目指して、研究を進めておられました。子どもたちも自分たちで思考し、工夫する久保先生の体育の学習が大好きでした。また、研究部

長をお務めいただき、現在のLaboratory, Home, Classの三つの活動領域による教育課程の礎を築くことにご尽力いただきました。

今後は、玉川大学で教員になりたい学生への指導にあたり、後進の育成にご尽力いただけるものと思っております。今後のご活躍をお祈りいたします。

▽大島静恵 先生

平成三十一（令和元）年度に本校に赴任され、五年間在職されました。

国語がご専門で、相手を尊重し相手の言葉を受け止め、共感的に理解しながら話し合い活動を行う授業などを実践されました。国語を通して人として生きていく上で大切なことを伝えようとされていたと感じています。学校研究では、Laboratoryの立ち上げ時には、検討委員会メンバーとしてご尽力いただき、その後は研究部員としてClassの活動を学校の中心になって進めていただきました。

今年度、清瀬市立清瀬第四

小学校へ異動され、主幹教諭というお立場になられ、学校の中心となって教育活動を支えられていることと推察いたします。今後のご活躍をお祈りいたします。

▽八代りり 先生

令和四年度に本校に赴任され、二年間在職されました。

学校中を精力的に歩き、全校の子どもたちの健康状態、心の状態を把握するように努めてくださいました。保健室で病気の子どもへの対応、け

がの処置はもちろんのこと、教育相談部として子どもたちが安心して学校生活を過ごせるよう、子どもの困りごと悩み事にも寄り添い、積極的にかかわってくださいました。八代先生に支えられ、元気に過ごすことができたお子さんもたくさんいたと思います。

今年度、東京学芸大学附属大泉小学校へ異動されました。同じ本学附属学校ですので、今後も研修会・研究会等で交流する機会が多くあることと思っております。今後のご活躍をお祈りいたします。

二〇二二年度の同窓会 幹事長 森 昭彦

◆同窓会員数の現状について

本年七月一日現在の名簿上の現存会員数は一〇、二五九名、その内住所が判明している会員が七、二一四名です。

◆フェイスブック

一昨年開設した青山附属同窓会公式フェイスブックには、すでに五〇〇人以上の方が登録されています。クラス会の報告、OBの先生方の回顧談など、多くの方から興味ある投稿をいただいております。是非多くの方に参加していただきたいと思えます。

◆附小サポーター

昨年フェイスブック上で附小サポーターを募集したところ、十三名の方が名乗りを上げてくださいました。昨年は学校のプログラム、特にラボ活動への協力が主目的でしたが、今後はさらに、学校の活動の様々な面での支援も考えていきたいと思えます。

昨年度、実際に実現したらボへの協力は一件だけでした。

学校からの依頼が時間的に急であったことなどのため、

テーマと日程の合う講師を探すのに苦労したようです。子供たちが求めるテーマの設定が流動的になるようですが、なるべく早い対応を学校側にお願しております。

また、様々なテーマが出てきますので、こんなテーマでなら協力出来ますという方は、どしどし登録してください。

◆藤の実ファミリーデーへの参加―懇親会に代わって

昨年度は、従来の懇親会に代わり、小学校のPTA主催の「藤の実ファミリーデー」に参加することによる同窓生の集まりを企画しました。

結果として、たくさんのお同窓生と、ご家族の方々の参加がありました。一九四〇年代・五〇年代卒業のお年寄りから、従来の懇親会では参加できなかった中高生まで、幅広い年代の方々が来場され、

現役やOBの懐かしい先生方との会話が弾みました。一方で、ご高齢の同窓生の方々が、ゆっくり休みながら交歓できる場が用意できなかったことが悔やまれます。今年度も参加する予定ですが、より良き会にできるよう、改善していきたいと思えます。

◆他附属の同窓会との懇談会

昨年八月、学芸大学附属高校同窓会（辛夷会）の呼びかけで、学芸大学附属校の内、附高、竹早小、小金井中、大泉中、世田谷小の五校の同窓会役員（本会からは森）が集まり、同窓会運営に関し、情報交換・意見交換が行われました。

イベントや会報、会員の連絡先把握と名簿管理、会費徴収、さらに母校の設備更新の問題等多岐にわたる事項が話題となり、各同窓会とも同様な課題をかかえているとして、今後交流を重ねていくことになりました。

◆創立一五〇周年記念事業

創立一五〇周年が二年後に迫りました。学校とも緊密に協力して計画を立てて参ります。

卒業七〇周年記念 最後の「花園会」

一九五四年(昭和二十九)卒 一組 東 誠・住田敏子

去る三月十五日、コロナ禍で五年間中断していた我がクラス会「花園会」を三軒茶屋のキャロットタワーのレストランで開催しました。

「花園会」には、六年間担任をされた花村郁雄先生と奥様のほか、毎年、二〇名前後の生徒達が出席してきました。

一九八九年に先生の叙勲のお祝いをし、一九九三年には、先生の作詞に級友のチェロリスト、勝田聰一君が作曲した「花園会の歌」ができました。

また、二〇〇二年に私達が還暦の時には、先生が皆にバウムクーヘンを贈って下さったのは、うれしい思い出です。

私達は今年で八十二歳となり、今回を全員に呼びかける最後の「花園会」として開催した結果、卒業時四十四名のうち、女性十名、男性八名、計十八名が集まりました。

始めに、花村先生ご夫妻と亡くなった十四名の友のために、黙祷と献杯をしました。



昼食後は、出席者全員が近況報告をし、これまでの人生で得たこと、またクラスでの思い出など語りました。特に、卒業の時に、先生が女生徒を花に例えたことが披露され、よく当てはまっているのには一同感心した次第です。

「花園会」の最終報告書には、出席者のスピーチはもちろん、欠席者から聞き取った内容も載せ、花村先生ご夫妻の墓前にもお届けしました。

今後のクラス会は、有志で不定期に開く予定です。

「山菁会」の同窓会

一九四七年(昭和二十二)卒

二組 水田潤一・小林俊明

昭和十六年春、東京青山師範附属国民学校へ入学した生徒約一四〇名、三組に分かれ、私のクラスは二組、担任は山崎幸一郎先生(青山師範卒業仕立ての新進気鋭の好青年)のもと、波乱の六年間が始まった。

その年の十二月八日には第二次世界大戦が始まり、三年生の後半からは、戦況の悪化とともに東京を逃れ、集団疎開・縁故疎開とクラスメイトとはばらばらになり、昭和二十年八月の終戦まで耐乏生活をした。

われわれの二組は、同じクラスメイトとして同じ山崎幸一郎先生のもと国民学校を卒業し、新設の青山師範附属中学校(第一師範)へと進学することになった。

波乱万丈の六年間、同じ恩師山崎幸一郎先生の思い出を永久に残すべく、誰ともなく山崎の字を冠した同窓会《山菁会》を結成して毎年一月十五日の成人の日に集まるこ

ととし、最初の何年かは山崎先生のご自宅(川崎市)に集合しながら同窓会をスタートさせたものであった。

そして還暦の六〇歳を迎えても半数以上の三十人位は、幹事役の萩村君の尽力のおかげで毎年楽しい一時を過ごしたが、七〇歳頃から身体の故障者や死亡者が出るようになり出席者も激減した。

七十五歳(二〇〇九年)には十六名、八十歳(二〇一四年)には十名、八十五歳(二〇一九年)は九名、そして二〇二〇年の八十六歳には六名の出席者を最後にコロナの蔓延となり、開催ができずに二〇二四年一月十五日に開催することとなったが、出席者は幹事二名のみのものであった。

あと十年は一〇〇歳をめざして続けていきたいので、毎年一月十五日に出席いただける同期生の連絡を待っています。

あしたば会卒業六十二年目の

クラス会―浦島太郎の思い

一九六三年(昭和三十八)卒 二組 春木 博

あしたば会(八十六期二組、ご担任・高田早穂見先生、伴憲三郎先生)では、去る令和六年四月二十七日(昭和の日)に、新橋の中華料理店にて、卒業後六十一年目のクラス会を開催しました。

六年間皆一緒のクラスで過ごした四十四名の内、半数の二十名の参加です。女性メンバーは橋上(吉成)和子さんのネットワークで直ぐ連絡が

付きましたが、男性メンバーは確固としたネットワークが無く、月に一度例会(飲み会)を続けてきた尾見仁一、洲川隆太郎、境野典夫、池沢寛君達が古い名簿を基に調べ、会の開催に漕ぎ着くことが出来ました。

当日は、幹事 尾見君の掛け声で、鬼籍に入られた高田先生はじめ四名への黙祷で始まりました。久し振りのクラス会です。男子同窓生は殆どが白髪姿で、小学生時代と様相が全く変わり、誰だか分からない。他のお客さんが部屋を間違えて入って来ているのかも知れない? 更に、出席者の中には高校生になって身長が大きく伸びたと言う仲間もいて、名前を聞くまで誰が誰なのか分かりませんでした。

片山愛一君他の用意してきてくれた、当時の数々の写真や文集を皆で拝見、可愛い顔を指さしながら、「これは誰

だ?」とクイズのやり取り。海外在住、お孫さんの里帰り他、都合が合わず欠席された皆さんからのメッセージも伝えられ、アツという間に皆が一つになりました。三年の竜宮城生活から帰って来て玉手箱を開けたら三〇〇年後の全く知らない人間界をまざまざと見せられた浦島太郎が、もし六〇年後の人間界を見ていたら、ちよつと違うストーリーになっていたでしょう。一緒に仲良く附小時代を過ごした仲間達は、各人別々の世界で歳を積み重ねてきても、一堂に会せば直ぐ昔の世界に駆け戻れるのです。

今回の同窓会開催で連絡先も整備されましたので、来年二月に附小キャンパスで開催される次回の「藤の実ファミリデー」には、是非皆さんと声を掛け合せて、我々が学んだ小学校校舎、グラウンド、藤棚、そして卒業記念作品のカンガル―と再度面会し、もう一つの玉手箱を開けたいと思います。



一九五五年卒二組 若草会

一九五五年(昭和三十)卒 二組 森 昭彦

一九五五年卒業二組西脇
学級のクラス会若草会が、
二〇二四年四月十日、三軒茶
屋の銀座アスター三軒茶屋賓
館にて開かれました。

一年ぶりのクラス会でした
が、思い起こしてみると今
は失われた下馬校舎での入
学式以来七十五年、卒業以
来六十九年の時が流れてい
ました。補欠を含め入学者
四十五名(男子二十三名、女
子二十二名)のうち、在学中



に一名、卒業後八名(男七名、
女一名)が故人となり、この
一年半の間にも三名の方が鬼
籍に入られ、だんだんと寂し
くなっていきます。住所不明
の一名を除き、三十五名の生
存者のうち出席者十五名(男
性四名、女性十一名)でした。

会は、亡くなられた方への黙
祷から始まりました。クラス替
えもなく、担任は六年間を通し
て西脇先生でしたので、しばら
くぶりで見忘れた顔も、直ちに
昔に帰り、小学時代のやんちゃ
ないたずら話を披露しあつて
笑い合いました。とうに時効に
なってもう先生に叱られる心
配もありません。みんなで童心
に帰っての楽しいひと時の二
時間半でした。難病を押して車
椅子で出席された高橋泰子さ
ん(劇団四季で丹泰子として活
躍)のライオンキングの熱唱に
は皆心を打たれました。

歳はとっても若草のよう
に、来年の再会を誓い御開き
となりました。

思い出の千倉

一九七六年(昭和五十二)卒 一組 米川和生

附小一〇〇周年の一九七六
年(昭和五十一年)卒業の米
川です。(現在六〇歳)

二〇二四年二月に南房総市
イベント(35キロ・ウォー
キング大会)で千倉へ行く機
会があり、「ちくらつなぐホテ
ル(旧青山荘)へ一人で宿
泊しました。

僕が小学校だった時(一九
七四年改築時)のデザインを
うまく残したりリノベーション
建物で、食堂/玄関/中庭な



ちくらつなぐホテル 中庭

どぼぼ昔と変わらない雰囲気
で、とても感激しました!
懐かしい中庭で夜一人で焚き
火でワインを飲み、翌朝はホ
テル前の海岸で「ザザーっ」
という千倉特有の波音を楽し
み、丘の上にある高家神社に
も行ってみました。

このような自然風景が沢山
残っている素晴らしい場所を
小学校時代に何度も訪れるこ
とができて幸せだったんだ、
と改めて思いました。



第二回膝栗毛会 昭和52年8月22日-24日 於青山荘



千倉の海(青山荘の真ん前)

PS(追伸)

中学二年の夏(一九七七
年八月)に旧青山荘で小学
校のクラス会を行いました。
僕ら同様に青山荘そして千
倉が大好きだった大熊徹先
生の発案です。その大熊先
生がご病気で今年四月にお
亡くなりになりました。新
卒でいらした大熊先生の熱
血感溢れる指導のもと僕ら
は本当に楽しい四年間(小
三〜六年)でした。ご冥福
お祈り申し上げます。

贖罪

元教諭 高橋阿楚江

私が附小へ初訪問した日は梅雨時、しつとりと雨に濡れた藤棚、その美しさは一幅の絵のように今もよみがえってきます。

私はこの七月で九十二才に。昭和初期から目まぐるしく激動してきた世界とその日本、その中で駆け抜けてきた世代の一人です。

昭和十五年、私が池袋第五小の二年生の夏、父がこのままだとまた二度目の召集を受けることになるだろうと、時の殖民地政策にのって、朝鮮総督府の検事として渡鮮を決めました。

◆朝鮮の都市大田そして群山へ

国語常用（朝鮮語は使用禁止、全て日本語を使うこと）、創氏改名（己れの姓名をすて、日本名にすること）、何と無茶な話でしょう。すっかり日本化してしまった町並みも住居も、日本人の為のものになっ

てしまっている。先住民は街の外へ追いやら

れ、低い山はまるでキノコ山、中腹まで住居（小屋）です。

ある時、その山の一軒の火事を見ました（三キロ位離れた地から）。火が出てあつという間に小さな小屋は燃え尽きてしまった。消火の設備など有りようもなく、類焼の心配もないような貧しい人々の暮らしのようです。

市場へ行つて、朝鮮の食材の数々を見、それ等を買う人々の群れの中に入って、やっとここは朝鮮なんだと実感したことでした。

◆五年生の一学期、南から北上して江界へ

江界は風光明媚な避暑地です。

春。鴨緑江の支流の禿魯江を眼下にみて、「春の日や、筏流るる禿魯江」。

夏。立ち並ぶ楡の木（大樹です）で（佛法僧）ブツポウソウと聞こえる、コノハズクという鳥が、夜のしじまの中で強く鳴く。昼は川向こうの

山合いでカツコウ、カツコウと。秋。楡の木から羽のついた種がクルクルと舞い下りてくる。いっぱい。まさに童画の世界。

冬。大きな魚もみかんも何もかも氷って、お勝手に届き

◆昭和二十年八月十五日敗戦

逆に回り始めた日本人の生活。八月十七日はマンセイ、マンセイの独立の歓声が響く。あがめ奉るべしの神社も焼

討ちで脆くも崩れていった。畑のトマトをいっぱい包んで抱えて、妹と部隊長の許へ届けにいった。中庭には銃剣

がベルトごと放置されている。兵隊達は丸腰になって、体を丸めて大部屋にころがっている。大豆食ばかりでおなか

をこわしている、という。陸軍倉庫の管理部隊だったから、その後、倉庫を開扉して

て食料供給できただろうか。何日後かに日本ではなく、北上していく列車でシベリアに

運ばれて行ってしまわれた。進駐してきたソ聯軍が全て

姉も戻る。東洋一を誇った水

豊のダム建設の学徒動員から兄も帰宅。しかし父は、ピョ

ンヤンの刑務所へ収監される。

国の独立運動家の立派な青年に刑を言い渡すことは辛

いと。戦中の裁判の頃、父は辛

かったようだ。後日、母から

聞いた。日本人は東西南北に分散拘留、その地に翌二十一年五月初め迄。この九ヶ月は日本人

の集団で自衛していた事は大きな力だった。北緯三十八度線を越える時は三日三晩

かかったが、よく歩き通したものでした。

◆在鮮時代（小一〜中二）私の根底には知らぬ間に、贖罪のひと言に尽きる思いが

培われていた。誰に聞くでも

のこと。原爆展のように全てを見ま

しょう、知りましょう。そして一緒に考えましょう。ド

イツの小学校で、日本人の一年

生の息子が、アウシュビッツのお話を聞いているとのこと。老人の話を、友人もいっしょ

にです。三年程前、ニュースで先の大戦の損害賠償を終了したこ

とを知りました。私は飛び上がる程驚きました。そして頭

を下げました。ドイツ国の方に向いて。同じ敗戦国なので

です。どこで違ってしまったのでしょうか。

九十二才でも考えます。夕暮の日本でなく、明るい夜明けの光が見えてくる日本。

そう！ 何だか嬉しそうな顔が、お互い見合っているわ。フフフ。



附世小は教師を育てる学校

元教諭 林 四郎



私の附属世田谷小学校（以下「附世小」と）のご縁は、今から五十五年前の一九六九（昭和四十四）年秋、大学三年時の教育実習から始まり、その後、第一学年の担任でいらした荒井孝先生（故人・元附世小教頭・公立学校校長）の学級へ配属になり、とても中身の濃い三週間を過ごしました。

東京学芸大学への入学は、「学校の先生になって、子供たちの教育に携わりたい」という中学校時代からの夢の実現のためでした。しかし、現

実はそう甘くはなく、当時、大学の中では教職を目指すことを主としている人を軽んじる雰囲気すら感じました。

◆夢の実現に向けて

再スタート

大学内の雰囲気や単位履修を始め、日々の生活に埋没し、ややもすると純粋に教職への道を追求する気持ちも薄れかけてきたとき、教育実習生に対して純粋に接してくれる一年生の学級に配属になったことは、私の人生を教職への軌道へ戻してくれた画期的な出来事でした。

附世小での三週間は、私の人生の中で、今でもキラキラと眩しく輝いている三週間です。「このように純粋な子供たちと日々接していく仕事、やはり教職こそ、自分の進むべき道であり、どんな困難があ

ろうとも、初志を貫徹して学校の先生になる」決意を新たにしました。

学大を卒業して大田区の小学校で四年間の勤務後、再度ご縁があつて一九七五（昭和五〇）年四月に附世小に着任いたしました。

◆附世小で学んだこと

温かくも厳しい教師集団の組織である附世小の十八年間で、私自身、若手教員からベテラン教員と呼ばれる教師としての大部分のステージを経験しました。その後、公立学校教頭・校長になりましたので、現職の教員としては、附世小が全てと言っても過言ではありません。

当時の附世小の研究については、ほぼ同時期に在職されていたお二人の先生、本会報誌「藤棚」五四号の松山武士先生、菅原節生先生の玉稿に詳しく紹介されていますので参考にしてください。

改めて、「貴方にとって、附世小で学んだことは何ですか？」と問われたら、私は、第一に「常に子供を見失わずに教育活動（学習や生活の指

導等）を実行することの重要性」を、そしてもう一つ「何事も納得いくまで議論し、その上で実行していく集団づくり」と答えます。

「子供を見失わない教育」は、当たり前のように思いますが、政治・経済や社会の中では、忘れられて議論されていることが多いように感じます。

私は現在、理科や生活科を中心に、年間一五〇人を超える小中学校の先生方の授業を参観し、アドバイス（一緒に悩んでいる）の方が当たっている）させていたただいておりますが、上記二点は、その話し合いの中で常に話題になる内容です。

◆教職の重み

十年近く前に行ったクラス会で、子供の頃とても静かだった人から「先生は、目立つ子ばかりを相手にしていて、私のような目立たない子には、注目もせず手を差し伸べてくれなかった」と言われました。

その人がそう感じたのだから、そう感じさせてしまった教師である私の責任を強く意

識してしまい、一言の弁明・弁解や質問もせず、ただ話を聞いて、「申し訳なかった」ということだけしか言えませんでした。

教職を退いた後に聞いたその言葉は、私が附世小から学んだことの重要性を更に裏打ちするものでした。改めて教職の重みを意識した出来事で、今感じるのは、嫌な気持ちより、これからも教職について考え続けることができる、嬉しい気持ちの方が強く残りました。私が一生抱えながら後輩に語り継いでいくことの一つになりそうです。



2023年度(2023年4月1日～2024年3月31日)青山附属同窓会 会計報告

2. 経常会計(単位：円)

収入	金額	支出	金額
前年度より繰り越し	14,139,985	2023藤棚印刷費	437,440
		名簿印刷費	11,690
収入	1,872,000	回線使用料	76,336
* 藤の実フェスタ	60,000	データ管理費	178,200
		事務手数料	83,400
銀行利息	20,477	2023藤棚・名簿発送費	841,493
		通信費	16,990
		事務用品費	550
		慶弔費(弔事・卒業祝)	0
		交際費	17,664
		会議費	1,080
2020年度収入合計	1,952,477	交通費	0
		* 藤の実フェスタ	60,000
		振込手数料	30,428
		会費返金 2名分(5000*2)	10,000
		雑支出	10,000
		本年度支出計	1,775,271
		次年度へ繰越	14,317,191
合計	16,092,462	合計	16,092,462

1. 同窓会基金(単位：円)

収入	金額
前年度より繰り越し	3,303,701
銀行利息	56
証明書手数料	550
合計	3,303,207

3. 資産の部(単位：円)

明細	金額
同窓会基金分	
三菱UFJ信託銀行	3,303,207
経常会計分	
三井住友銀行通知預金	0
三井住友銀行定期預金	0
三井住友銀行普通預金	11,076,500
ゆうちょ銀行総合口座	1,588,721
ゆうちょ銀行振替口座	1,599,009
現金	52,961
合計	14,317,191
基金+経常会計合計	17,620,398

会計監査承認 会計監事：坂内 隆

創立一五〇周年 に向けて

同窓会では、長い歴史を受け継いできた卒業生や、多くの教職員の皆さんの思いを後世に引き継いでいくため、大きな区切りの一五〇周年を、皆さんと楽しくお祝いしたいと思っています。様々な企画の検討を始めています。

具体的なアイデアとしては、①一五〇周年記念式典・懇親会の開催、②桜(植樹)プロジェクト、③藤棚(維持)プロジェクト、④一五〇周年記念寄付、等が出ていますが、今後、小学校の希望なども踏まえて検討していくこととなります。

同窓会では、一緒に活動していただける同窓生の方を募集しています。是非、同窓会事務局まで、ご連絡下さい。(会長・一力健一郎)

集団疎開関係資料を 探しています

昨年、創基一五〇周年を迎えた東京学芸大学の大学史資料室では、附属小学校関係の資料収集も行っており、同窓会にも協力の依頼がきました。

会員の皆様のお宅や御実家等に、特に、学童疎開の関係資料が眠っていないでしょうか。集団疎開時の日記や記録、写真、学校や担任から生徒への配布物、文集等がもしございましたら、これらをご提供いただければ幸いです。

まずは青山附属同窓会まで一報・ご相談下さい。

附小サポーター募集!

母校のために何かしたいとお考えの卒業生を常時募集しております。具体的なサポート例としては「児童の探求授業の外部講師」「校外学習の機会の提供」「学校環境の整備のお手伝い」「学校行事の際の補助業務」等があります。詳細は、青山附属同窓会までお尋ね下さい。

ご協力いただける方は、下記の登録フォームにご記入後、ご提出ください。お待ちしております。



サポーター登録フォーム
<https://forms.gle/nvok9rfed1o7DAsV6>

同窓会 Facebook

同窓会の Facebook グループを立ち上げました。Facebook 上で「青山附属」と検索してみてください

クラス会開催の報告記事を募集しています。「千倉に行ってきましたよ!」といった報告や、写真のみの掲載も大歓迎です。ご一報、お待ちしております。



訃報

大熊徹先生(一九七二～八二年在職)が、二〇二四年四月一日に逝去されました(享年七十五歳)。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。